神戸国際大学
キリスト教センター通信
第142号
2026年1月13日

「自由の意味」

神戸国際大学
キリスト教センター職員　加藤 俊彦

地獄と極楽の食事風景を表した浄土真宗の民話があります。

地獄でも極楽でも食事をする際には、中央に一つの大きな食卓があり、その上にはたくさんのご馳走が置かれ、人びとはその食卓を囲んで座り、背丈ほどある、とても長い箸を使って食事をしていました。

地獄での食事の様子は、食卓を囲む人びとの頬が皆こけ、その風貌はげっそりとして、その雰囲気はいらだちに満ちていました。人々は我先に食事にありつこうと、長い箸を使って何とか食べようとするのですが、その箸があまりにも長すぎるので、自分の口にご馳走を運ぶことができませんでした。だから、皆お腹がすき、またほかの人がご馳走を食べてしまうのではないかと疑心暗鬼になっていました。

極楽での食事の様子は、食卓を囲む人びとが皆おいしそうに食事をし、心穏やかで、その雰囲気も笑顔が絶えない喜びに満ちたものでした。一人の人が長い箸で食べ物をつかむと食卓の向かい側にいる人に食べさせてあげ、今度は食べさせてもらった人が、食べさせてくれた人に長い箸でご馳走を食べさせてあげていました。だから、皆満腹し、笑顔が絶えませんでした。

長い箸があることによって、自分の思うが侭に、食卓のご馳走を食べることができません。普通の長さの箸であれば、自分でご馳走をつかみ好きなものを好きなだけ食べ、満腹になることができます。しかし、それでは、自分のお腹の中が満ち足りるだけです。長い箸という不自由さ、不便さ、窮屈さがあることによって、ご馳走を食べるために知恵や考えを出し合い、その結果として助け合って食事をし、皆が満腹し、喜び合える状況が生まれました。同じようなことを伝える話として、日本の狂言の中に「棒縛り」という演目があります。

不自由さ、不便さ、窮屈さは、一般的な価値観からすると否定的に捉えられます。しかし、この民話は、人生における、そのようなマイナス要素を肯定的に捉え、それらがあるからこそ、“助け合う”ことや“分け合う”ことへと導かれ、自ずと皆が喜び合える関係が築かれることを教えています。

私が以前牧師をしていた時、結婚を望むカップルに対して、結婚すると不自由さを伴うから、自由な人生を生きたければ結婚しない方が良いと伝えていました。物事を選んだり決めたりする時、相手の意見をいちいち聞いたり、互いの合意点を見出そうと、面倒くささや煩わしさに直面します。また、時に喧嘩や言い争いをして嫌な思いをしたりします。しかし、そのような不自由さがあるからこそ、互いに話す、共に喜ぶ、一緒に笑うという出来事が生まれます。

“自由”とは、自分の好きなように何でも意のままに出来ることではなく、自分が誰かと一緒に生きていくという、いわば他者を愛するという不自由さや不便さや窮屈さの中で、より良い生き方を選ぶことができる自由、それが本来の自由の意味だと思います。これから迎える新しい環境の中で、みなさんどうぞ自由を謳歌してください。

ひとくちメモ

今年のイースターは4月5日（日）です。イエス・キリストが十字架上で死に三日目に復活したことを記念する、紀元1世紀には祝われていた、キリスト教最古で最大のお祭りです。もしキリストが復活していなかったら、キリスト教信仰によって建てられた本学は、この世に存在することがなく、キャンパスに集う学生も教職員も今ここにはいなかったことになります。